

# 長崎と隠元

～黄檗文化の広がり～



ミュージアム県  
ながさき

10 History and Culture of Nagasaki  
2021 Spring

長崎の東明山興福寺の住持逸然は、当時の日本仏教界の荒廃を憂っていました。逸然の会下\*にあった無心性覚の懇請もあり、黙子や唐通事、有力な檀越（寺の支援者）らと協議して、隠元を招請することになります。

承応元年（1652）4月、最初の招請状を送りましたが、隠元は高齢のためとして辞退しました。2度目の招請の時、逸然は手紙に路費百金、香帛\*8種を添えて発送しましたが、途中海賊に奪われて隠元には届きませんでした。しかし、逸然らはあきらめることなく、翌年11月までにさらに2度招請状を送ります。

隠元は、最初は辞退したものの、その熱意に応じて日本へ渡ることを決心します。中国で強く引きとめられましたが、3年たてば帰国する約束で日本へ渡ることとなりました。



▲最初の招請に対して辞退する内容の隠元からの返書／「第一請啓復書」順治9年(1652) 京都 萬福寺蔵

\*会下：師僧の門下に集まって修行する所  
\*香帛：お香、蠟燭、紙などの儀式用品

三顧の礼に答えて来日したんだよ。長崎に住む中国人たちが頑張ったおかげで、隠元さんにいらしてもらえたんだね。



隠元の来日  
「すごい僧が長崎にやってきた！」

徳の高い名僧という隠元の名前はすでに日本にも届いており、その隠元が来日するといううわさは、長崎以外の地にも早くから伝わっていました。隠元渡来を待ち望む人々の中には、了翁道覚のように、隠元渡来の2年も前に江戸を発って長崎に向かう人がいたほどでした。



▲「黄檗山国師来朝到岸之図」禅統紹 19世紀 法田寺蔵

承応3年（1654）6月21日、隠元を乗せた船は廈門を出帆。同年7月5日、長崎に入港します。そして翌日、隠元は逸然らに迎えられ興福寺に普山\*しました。

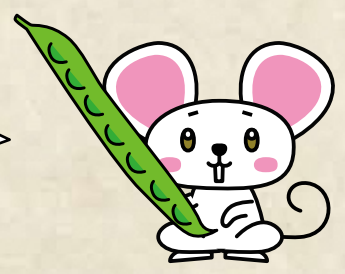
来日した隠元のもとには昼夜を問わず、僧俗男女が入替わり立ち代り訪れ、特に臨済宗妙心寺派の僧衆は老僧、若僧、紫衣（高位の僧）も黒衣（修行僧）も200人ほど集まったといわれています。隠元の人気ぶりはその後も続き、寛文7年（1667）に奈良を訪れた際には、隠元が訪問する所に、どこも千人ぐらいの人がついて歩いたと記されています。

このような隠元ブームとともに、黄檗ブームも巻き起こりました。隠元とともに来日したのは30名ほどでしたが、黄檗僧の他に職人などもあり、黄檗文化と呼ばれる明末清初の中国文化が直接日本にもたらされ注目を集めるきっかけとなりました。人々は、まるで五感で吸収するかのように黄檗文化に触れ、熱狂的に支持し、黄檗ブームは長崎から日本全体に広がっていきました。

\*晋山：住職として赴くこと

# 1 隠元とは — 隠元の魅力と功績 —

ボクは、隠元さんに可愛がってもらっている白鼠だよ。みんなは、ボクのことを大黒天の使いだって噂してるんだ。たくさんの人がボクを見に萬福寺にやってくるんだけど、ボク以上に人気があるのが隠元さんなんだ。隠元さんは、黄檗ブームの火付け役。これからボクが隠元さんを紹介するね！



隠元隆琦 (1592~1673)



▲「隠元騎獅像（部分）」喜多道矩筆・隠元隆琦賛 長崎歴史文化博物館蔵

中国福建省福清生まれ。俗名は林曾炳。28才の時、黄檗山萬福寺で仏門に入りました。その後、名僧と知識を求め各地で修行。天啓6年（1626）、金粟寺で悟りを開き、崇禎10年（1637）に萬福寺の住持\*となります。その後、福嚴寺、龍泉寺の住持を歴任し、再び萬福寺の住持となりました。衰退していた寺院の経営を立て直し、門人の育成に努め、指導者としても尊敬を集めました。

中国仏教界で大きな勢力を誇った禅宗のなかでも特に臨済義玄以後の正統の教えを受け継ぎ、修行に厳しい人でした。しかし人柄は非常に温厚で心優しく、人々から厚い人望を集めた名僧でした。高僧としての隠元の名前は、語録などの出版物を通して、遠く日本にまで伝わっていました。

長崎興福寺の住持逸然らの4度に渡る招請を受け、63歳という高齢で来日。長崎の興福寺、崇福寺の住持を勤めます。臨済宗普門寺の住持龍溪らの働きかけで摂津の普門寺へ移り、万治元年（1658）、4代将軍徳川家綱に面会。その後日本に留まり、黄檗山萬福寺を開創。臨済宗黄檗派（後に黄檗宗）の開祖となりました。寛文13年（1673）示寂\*。

\*住持：禅宗寺院の住職のこと \*示寂：高僧の死



画像の隠元さんは、偉いお坊さんなのに威圧感がなくて、目が笑っているよね。修行の場以外では、温和で優しい人なんだよ。

\*主なできごとをまとめた年表は24ページにあります。

隠元は出家前、売られている生き物を見ると必ず買い取って放したり、住持となった萬福寺では昼時になると自分で買った米を鳩に施すなど、生き物に深い愛情を有し、放生を勧め殺生を戒める詩偈\*を多く残しました。また、出家し修行を積んで高位の僧になっても、先師の苦勞を語る時にむせび泣き、師翁\*密雲の塔を掃い感極まって涙する一方、花や風景に感動して詩偈を残すなど感受性豊かな一面も持っていました。そして、訪ねてくる者にはいつも分け隔てなく接したといいます。人間隠元は、本当に愛情深く心豊かな魅力的な人だったようです。

ところで中国において高名な禅僧であった隠元は、来日する前からすでに日本で有名であり、釈迦・達磨の再来と言われるほどでした。その隠元の日本における主な功績を見てみましょう。

江戸時代はじめ、日本の仏教界は幕藩体制\*の枠の中に閉じ込められ、活動の自由が無く、閉塞感が強まっていました。そこに隠元によって中国の正式な禅宗のスタイルがもたらされ、日本仏教に革新的な変化をもたらすこととなります。例えば、奈良時代の鑑真が日本に伝えて以来、長らく途絶えていた仏教で最も重要な儀式の三壇戒会を再興し、あわせて、三壇戒会の順序や方法を詳細に記した『弘戒法儀』も刊行したことで、正式な授戒を日本でも可能にしました。

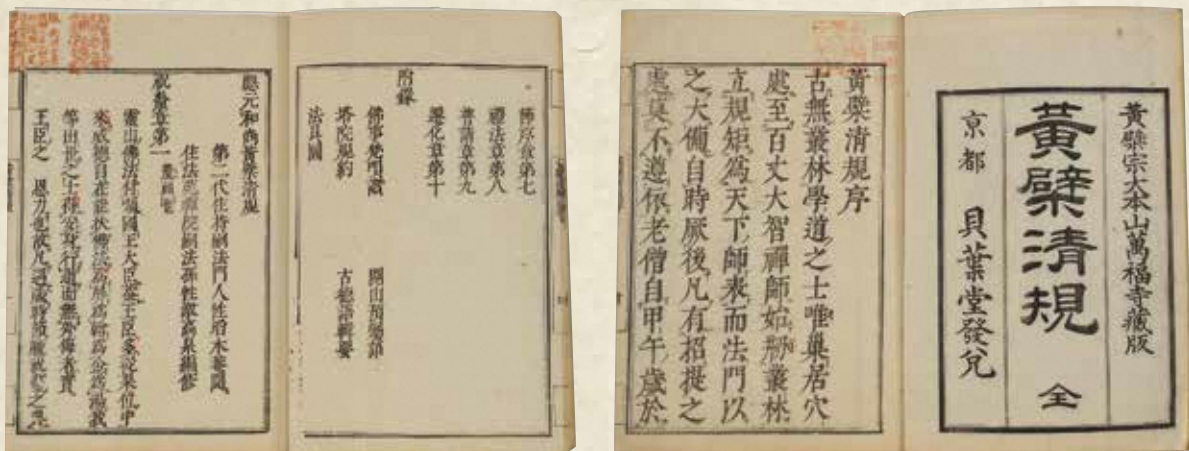
また、隠元によって導入された『黄檗清規』によって、中国の禅宗寺院と同様に規律正しい寺院運営と修行がおこなわれるようになりました。

隠元は、日本の宗教界に新たな風を吹き込み、規律を立て直ただけでなく、明末清初(17世紀)の中国文化、いわゆる黄檗文化をもたらしました。黄檗文化については後で詳しく触れますが、単に長崎だけでなく、日本で全国的に中国文化が受け入れられるきっかけとなり刺激となりました。そして、江戸時代の日本において幅広い分野で新しい文化を生み出す原動力となりました。

\*偈：韻文の形で、仏徳を讃嘆し教理を述べたもの。頌文(じゆもん)。偈頌(げじゆ)

\*師翁：師の師

\*幕藩体制：将軍と大名(幕府と藩)が土地と人民を統治する支配体制

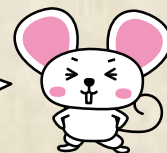


▲『黄檗清規』 江戸時代 京都 萬福寺蔵



隠元さんは、誰にでも優しくてひょうきんな人なんだけど、仏教のことになるとすごく真面目で厳しいんだよ。

隠元さんとゆかりの深い人たちを紹介するよ。



りょうけいしやうせん  
龍溪性潜 (1602~1670)



▲[大宗正統禅師  
龍溪大和尚頂相]  
萬松院什物

元和3年(1617)16歳の時、叔父の勧めで摂津の慈雲山普門寺に入り出家。その後、普門寺、龍安寺塔頭皐東庵、妙心寺などの住持を歴任し、紫衣を賜りました。隠元が渡来すると、長崎の禅林寺に滞在していた竺印から妙心寺へ招聘することを呼びかけられ、禿翁とともに隠元招請の積極的な支持者となりました。その計画はかないませんでした。隠元を普門寺に招請し、日本に留めるために奔走します。万治元年(1658)、隠元が江戸城で徳川家綱に面会する際には、禿翁と共に同伴しました。また、後水尾法皇と龍溪の交流は深く、法皇は龍溪の黄檗禅における唯一の法嗣\*でした。寛文9年(1669)、龍溪は隠元の最初の日本人法嗣となりましたが、翌年、大坂九島院を洪水が襲った際に、弟子たちの避難の勧めに応じず禅堂に座ったまま示寂しました。

\*法嗣：師匠の教えを受け継ぐあととり。

とくがわいえつな  
徳川家綱 (1641~1680)

徳川幕府第4代将軍。万治元年(1658)9月19日、江戸に到着し天沢寺に滞在していた隠元に、老中松平信綱と寺社奉行井上正利をつかわして慰労しました。同年11月1日、江戸城にて隠元と面会。隠元は、線香百本・唐墨16挺などを献じ、同行していた龍溪は『黄檗和尚華語録』6冊・『隠元扶桑語録』5冊・唐扇2本、禿翁は杉原(和紙)一束を家綱に献じました。家綱は隠元へ、衣と金を下賜しました。その後、家綱は隠元に帰依します。寺地や造営費、資材を支援し、宇治大和田の地に黄檗山萬福寺が創建・整備されました。



▲[徳川家綱像] 奈良 長谷寺蔵

ごみずのおほうおう  
後水尾法皇 (1596~1680)



▲[後水尾天皇像] 御寺泉涌寺蔵



▲後水尾法皇から贈られた舍利塔  
「金銅舍利塔」宮嶋半四郎次作  
寛文6年(1666) 京都 萬福寺蔵

後水尾天皇。在位18年。母は女御中和門院藤原前子(関白近衛前久の三女)。黄檗山の寺地は、もと近衛家領で中和門院の御殿があった場所です。

慶安4年(1651)5月6日、相国寺慈照院で仏門に入り、多くの禅僧に帰依しました。寛文3年(1663)、龍溪に隠元の禅要を問い、翌年、隠元に香木を贈り交流が始まりました。寛文6年(1666)6月29日、隠元に仏舎利5顆と舍利塔を贈り、これに対して隠元は高泉に命じ『黄檗山特賜仏舎利記』をつくらせました。隠元が示寂する前日には「大光普照国師」の号を贈るなど、隠元に深く帰依していました。

さかいただかつ  
酒井忠勝 (1587~1662)

川越城主、若狭小浜城主。徳川家綱時代の中老・大老。牛込下屋敷に沢庵宗彭の命名による延命山長安寺を建立。正保2年(1645)、徳川家綱元服<sup>げんぶく</sup>の総奉行を担当しました。隠元の帰国の意思を知った龍溪らの滞留運動に対し、幕閣の中心にあって終始積極的な姿勢をとりました。万治元年(1658)隠元が江戸に下った際、父忠利の三十三回忌の予修を請い、隠元は唐和僧十数人を伴って長安寺に赴きました。翌年、隠元へ日本での滞留を勧める書状を贈り、隠元は日本に留まることを決意しました。

※元服：男子が成人になったことを示す儀式

「酒井忠勝像」小浜市教育委員会提供▶



あおきしげかね  
青木重兼 (1606~1682)



▲「青木重兼像」沸日寺蔵 (画像提供：豊中市教育委員会)

摂津麻田城主。明暦2年(1656)、普門寺の隠元に帰依しました。万治2年(1659)、沸日寺を造営。隠元を招き額字を請いました。翌年、中殿を落成して隠元を開山第一代とし、隠元より「二木」の法号を得ます。寛文元年には、隠元を招いて7日間の小参<sup>せさん</sup>をおこないました。寛文7年(1667)、家綱から萬福寺に銀2万両と西域木(チーク材)の寄進があり、大雄宝殿を建立する際の造営奉行を勤めます。このとき、黄檗山内に不二庵を建立。留雲亭を構えて住みました。寛文13年(1673)、隠元示寂の日、弟と共に松隠堂に見舞いました。延宝7年(1679)所領の三田に方広寺を創建し、木庵を開山としました。

※小参：臨時に住持が方で修行僧に説法すること。

いなばまさのり  
稲葉正則 (1623~1696)

相模小田原城主。延宝8年(1680)まで老中。4歳で母を失い、祖母の春日局に養われました。龍溪らの隠元日本滞留周旋に、幕閣として酒井忠勝、忠清、松平信綱らと共に対応。黄檗の外護者となりました。隠元が江戸へ下った際には、養源寺に招き、釈迦如来像の安座を請い、法語を贈られました。また、宿舎の天沢山麟祥院に隠元を訪ねるなど、隠元との交流を深めました。他に、木庵や鉄牛、南源、高泉、悦山などの黄檗僧とも交流がありました。

「稲葉正則像」喜多元規 弘福寺蔵 (画像提供：墨田区教育委員会)▶



ながいなおまさ  
永井尚政 (1587~1668)

山城淀城主。江戸城天守・西の丸山里数奇屋の普請奉行や禁裏造営奉行、惣奉行、増上寺台徳院法会奉行を歴任。慶安元年、宝林山興聖寺を造営し、万治2年(1659)、隠元を宇治に招き興聖寺に宿泊させました。また、隠元ら黄檗僧を別荘に招き、隠元からは「緑磁観音像」が贈られました。この像は、現在も隠元の賛とともに興聖寺に伝わっています。寛文8年(1668)没。隠元は木庵と共に挽偈を贈っています。

▲「永井尚政像」興聖寺蔵

## 2 隠元と長崎



隠元さんがこられる前の長崎は、どんな様子だったのかな。

### 長崎の発展に 貢献した唐人たち

長崎では、隠元が渡来する前から多くの唐人が来日し、定住する者もありました。彼らの中には、石橋架設の技術指導や資金の提供をおこなったり、在来の寺社へ寄進する者がいました。また、長崎の地役人として町の運営に協力する者、医者や儒者といった専門的な知識や技術を伝える者もいました。

また、唐人によって整備された唐寺は、同郷出身者の集会所として機能しましたが、日本人との交流の場としての役割も担うことになりました。

このように、長崎の町づくりへの参加などを通して、唐人と長崎の人々との関わりは密になっていきました。交流拠点となる唐寺も整備されたことで、隠元の渡来以前には、長崎における中国文化の受け入れ基盤がすでに整えられていたのです。



▲興福寺2代住持黙子如定の指導で建設されたためがね橋

長崎に隠元さんがいらした頃にゆかりのあった人たちを紹介するよ。



いつねんしょうゆう  
逸然性融 (1601~1668)



▲「逸然禅師画像」浦川菊市筆 長崎歴史文化博物館蔵

興福寺第3代住持。隠元の招請に尽力し、隠元を興福寺の住持として迎えると、自らは監事となりました。隠元が普門寺へ赴く際、梅谷を随行させ、自らは遅れて上り、翌年長崎に帰りました。絵を得意とし、明末華南の画風を伝え、多くの日本人が絵を学びました。その中で特に渡辺秀石と河村若芝を育て、長崎画壇の基礎を作りました。



▲「達磨図」逸然性融筆 道者超元賛 長崎歴史文化博物館蔵

### 長崎における 隠元ゆかりの人々

くろかわまさなお  
**黒川正直** (1602~1680)



▲黒川正直が寄進した萬福寺の鐘楼 (画像提供: 京都萬福寺)

旗本。慶安3年(1650)11月長崎奉行に就任し、翌年6月長崎に着任。逸然らの隠元招請に関わります。承応3年(1654)7月6日、興福寺に晋山した隠元に、同役かいのしょうまさのぶ甲斐庄正述と共に謁見し、偈を贈られました。隠元へ普門寺招請に応じることを勧め、餞別の齋\*を設けました。寛文2年(1662)冬、非番で江戸へ向かう途中、新建の萬福寺に隠元を訪ね、送別の示偈を受けました。寛文5年3月、長崎奉行を退任し大目付となり、同8年、萬福寺に鐘楼を寄進。隠元から檀護だんごに対し感謝されました。延宝8年(1680)5月2日79歳で没。宇治の黄檗山万松岡に葬られています。 ※齋: 仏事の時の食事。

なべしまかつしげ  
**鍋島勝茂** (1580~1657)

佐賀藩主。寛永15年(1638)島原・天草の乱に出陣。同19年から長崎警備にあたります。隠元に最も早く関わった大名の一人で、承応3年(1654)冬、隠元に五色の法衣を贈り、隠元より返書を受け取りました。明暦元年(1655)、隠元が普門寺へ向かう際には、領内での警護に当たり、諫早江を渡る船を用意しました。大名として最も早い黄檗げこしゃの外護者\*で、領内には黄檗寺院が多く整備されました。 ※外護者: 宗教・寺院などを特別に保護すること。

「鍋島勝茂像」 公益財団法人鍋島報効会所蔵▶



すえつくへいぞう  
**3代末次平蔵** (?~1654~1669)



▲「清水寺末次船絵馬下絵」長崎歴史文化博物館蔵

長崎代官、朱印船貿易商。3代末次平蔵は、隠元の渡来を迎え檀護となります。隠元ほか、法子大眉ほうしだいびしょうぜん性善、独吼どっくしょうし性獅らを末次園に招きました。隠元から「昨非」の法号を得ました。

4代末次平蔵は、隠元80歳の賀を兼ねて登樂とうばくする千呆せんがい\*に母と共に同行。隠元から母と共に示偈を与えられました。密貿易が発覚し闕所\*となったのは、延宝4年(1676)のことでした。

※闕所: 全財産を没収されること。

※千呆: 渡来僧。崇福寺の中興第2代住持で、後に萬福寺第6代住持となる。

末次平蔵宅跡の碑 (現・桜町小学校) ▶



がこうさい  
**何高材** (1596~1671)

唐通事\*。福建省福州府福清の出身。崇福寺開創期の檀越として、その整備に尽力し、大雄宝殿の建造や梵鐘の鑄造などを支援しました。承応元年(1652)4月、逸然の第一回隠元招請書とともに送られた檀越の請啓(招請書)に名を連ねました。隠元の渡来当初より交流があり、承応3年(1654)夏、隠元より性崇の法名を授かります。そして翌年、『隠元禅師語録』『同統録』を出版しました。隠元の崇福寺晋山にも尽力し、その功に報いるために聖寿山の額を書き与えられました。寛文4年(1664)夏、宇治の萬福寺を訪れた際には、隠元をはじめとする唐僧が詩偈を贈って歓待しました。

※唐通事: 長崎奉行の配下に置かれ、通訳兼外交官的役割を担い中国との貿易交渉にあたった役職

▶崇福寺大雄宝殿額。額の左に何高材の名が見える。



▲崇福寺第一峰門

さかきにざえもん  
**彭城仁左衛門** (1633~1695)

唐通事。中国名劉宣義りゅうせんぎ法名道宣。明暦元年(1655)23歳の時、隠元の普門寺行きかつしょういんの通事として百余人の中から長崎奉行によって選ばれます。寛文元年(1661)、勝性印、独健性乾と共に萬福寺に西域木(チーク材)を寄進。同9年(1669)と12年(1672)に登樂し、隠元や木庵を訪ねました。博学で詩文の才能が高く、林道栄と並び称されました。隠元から贈られた法語・鞆ぼんげ偈、謝偈が残されています。延宝年間(1673-1681)に唐大通事最上席、元禄5年(1692)に唐年行司となりました。同8年、63歳で没。崇福寺に葬られています。

▶光永寺(長崎市桶屋町) 寛文の大火(1663)で焼失したが、彭城仁左衛門らに留唐人や檀徒によって再建された



▲「劉大基給像(彭城仁左衛門給像)」画者不詳 長崎歴史文化博物館蔵

はやしどうえい  
**林道栄** (1640~1708)



▲「林道栄像」画者不詳 長崎歴史文化博物館蔵

林家最初の唐通事。唐年行司を勤め隠元をはじめとする黄檗高僧へ参禅さんぜん\*した林公琰はやしこうえんの長男。道栄は、語学のみならず詩や書に優れ、その学才で高名でした。隠元に非常にかわいがられたことが知られています。彭城仁左衛門と林道栄は、共に長崎奉行牛込忠左衛門うしごめちゅうざえもんから殊遇を受けました。忠左衛門は、杜甫の漢詩の首句「東閣官梅動詩興」から彭城に東閣、林に官梅の号を授けています。

※参禅: 禅の道に入って修行すること。



▶七言詩「纓婦龍尾云々」林道栄筆 長崎歴史文化博物館蔵

# 長崎・唐寺めぐり

長崎に明(中国)の商人らが多数来航する中(\*1635年に唐船の来航は長崎に限られました。)、唐船に積まれた航海の安全を守る「媽姐(菩薩)」を長崎滞在期間中に安置する祀堂が必要となり、同郷団体である「幫」ごとに興福寺(南京、1620年創建)、福濟寺(泉州・漳州、1628年創建)、崇福寺(福州、1629年創建)の「唐三ヶ寺／三福寺」が建立されていきました。それは、キリスト教禁教下において、商人らが仏教を信仰していることを証明するための行為でもありました。これらの寺院は、1654年(承応3)の隠元禅師の来日により、禅宗寺院(黄檗宗)としての趣きが濃くなり、のちの1677年(延宝5)には、宇治の萬福寺で修行した禅僧によって聖福寺も建立され「四福寺」と称されるようになります。

中国の意匠が随所に見られる建造物や仏像など、一步入山すると、長崎に居ながらにして、たちまち中国の造形美の世界に包まれていきます。当時の日本人が最新の中国文化を驚きをもって眺めたであろう姿が想像されます。

## 東明山興福寺——「初登宝地」

興福寺(県史跡)は、1620年(元和6)に唐僧・眞圓が小庵を作ったことにはじまると伝えられます。隠元禅師が1654年(承応3)に来日後はじめて入山した寺院であり、隠元禅師を招聘したのも同寺の三代住持の逸然性融でした。二代の黙子如定は、石橋「眼鏡橋」(重要文化財)を架けたことでも知られています。

1663年(寛文3)の市中の大火で焼失したものの再建され、中国の工匠による本堂・「大雄宝殿」(1689・1883年再建、国重要文化財)や、同堂内の瑠璃燈(市有形文化財)、「あか寺」と称される所以となった山門(1690年、県有形文化財)、媽姐堂(県有形文化財)、鐘鼓楼(1691年、県有形文化財)、唐僧墓地(市史跡)など黄檗文化を象徴する文化財であふれています。

- 拝観時間: 7:00~17:00 \*年中無休
- 拝観料: 一般300(240)円、中高生200(160)円、小学生100(80)円 ( )内は団体料金
- 住所: 〒850-0872 長崎県長崎市寺町4番32号
- TEL: 095-822-1076



▶ 逸然筆、即非贊「白衣大士觀瀑図」1665年(長崎歴史文化博物館蔵) 長崎における漢画の祖・興福寺三代住持・逸然による



## 聖寿山崇福寺——今もなお全国から華僑が集う

福州地方の商人を檀越とする唐寺で、1629年(寛永6)僧・超然が招聘され、1635年(寛永12)に殿堂が建立されたと伝えられます。はじめ唐船に乗せられた「媽姐」を安置し、航海の安全を願う儀式等が行われていたといえます。隠元は、1654年(承応3)に興福寺に入山の後、翌年には崇福寺にも入りました。1657年(明暦3)には隠元の高弟・即非如一が渡来し、崇福寺の住持となり、中興開山の祖とされました。

長崎市内に現存する最古の建物で、釈迦三尊と奇怪な表情を浮かべた十八羅漢像(県有形文化財)が安置される大雄宝殿(1646年頃、国宝)や第一峯門(唐門)(国宝)は、いずれも中国で準備された建築部材が持ち込まれて建造された中国様式のものであります。また、竜宮城を連想させる三門(楼門)や鐘鼓楼・護法堂(全て重要文化財)など中国と日本の建築様式が融合した建造物もあります。毎年夏には、全国から華僑の皆さんが集い、先祖供養のための盂蘭盆会が行われます。

- 拝観時間: 8:00~17:00 \*年中無休
- 拝観料: 大人300円、高校生200円、小・中学生無料
- 住所: 〒850-0831 長崎県長崎市鍛冶屋町7-5
- TEL: 095-823-2645

▶ 釈迦三尊像と十八羅漢



## 分紫山福濟寺——往時の壮大な伽藍を想う

中国の建築様式で建てられた壮大な寺院で、1927年(昭和2)には国宝に指定されました。1628年(寛永5)に泉州から渡来した覺海が小庵を建てて媽姐を祀ったのが始まりと伝えられます。隠元来日の翌年に隠元の高弟で書をよくした木庵性瑯が渡来して、ここに入山しました。はじめ泉州寺、のちには漳州出身の潁川家が大檀越となったこと等から漳州寺と称されるようになり、長崎の唐寺で最大の伽藍を誇りました。泉州出身の第7代住持の大鵬は墨画を善くしたことで知られています。また、幕末には、勝海舟と坂本龍馬も逗留したと伝えられています。

布袋像や沈南蘋筆「牡丹の戸襖」などが人々に愛されていましたが、1945年(昭和20)に原爆により焼失しました。現在は原爆被災者や戦没者を慰霊する「萬国靈廟長崎観音」が建立されました。

- 拝観時間: 8:00~17:00
- 住所: 〒850-0052 長崎市筑後町2番56号
- TEL: 095-823-2663

▶ 「大日本肥前国長崎山下筑後町黄檗宗特別保護建造物 分紫山福濟禅寺境内略図」修翠館版1923年頃(長崎歴史文化博物館蔵)



## 万寿山聖福寺——奇矯な笑みの布袋様

興福寺、崇福寺、福濟寺の「三福寺」とあわせ、「四福寺」と称されています。木庵の弟子で、長崎生まれの禅僧・鉄心道胖のために、1677年(延宝5)に長崎奉行や在留唐人らによって創建されました。黄檗宗寺院特有の伽藍配置を継承した建造物は、鉄心が修行した萬福寺に倣った建築様式で、桃の装飾が目を引く大雄宝殿(1715年改修)や、布袋が福々しい笑みで迎えてくれる天王殿(1705年)、山門(1703年)、鐘楼(1716年頃)が建てられています。これら4棟は2014年(平成26)に重要文化財に指定されました。また媽姐堂が設けられなかったのも特徴としてあげられるでしょう。幕末には、海援隊の「いろは丸」と紀州藩船との衝突事故の賠償交渉が行われた場となったことでも知られています。

- 住所: 〒850-0053 長崎県長崎市玉園町3番77号
- TEL: 095-823-0282

弥勒菩薩の化身とされる布袋▶



## 「滝の観音」長瀧山靈源院——長崎の小秘境

1659年(万治2) 広東の商人・許登授が航行中に嵐に会ったものの、九死に一生を得たことから、古より霊場として知られていた「瀧の観音」を信仰し、1669年(寛文9)に同地に観音堂を建立して、広東から具奉した魚籃観音菩薩を本尊としました。もとより1660年(万治3)に奥の院に、木庵の弟子鉄巖が小庵を設けていたことから、観音堂建立にともない鉄巖が請われて黄檗宗寺院として開山されました。領主・諫早家の祈願寺であったことでも知られています。木立に包まれた静寂の中に、苔むした石仏や渓谷沿いの磨崖羅漢、石橋などが佇み、こちよい滝の清韻が日常の喧騒をしばし忘れさせてくれます。長崎の県指定名勝の第一号。

- 拝観料: 大人200円、小人100円
- 住所: 〒851-0136 長崎市平間町1646番地 靈源院境内
- TEL: 095-838-3701

▶ 瀧の観音全景 (「長崎古今集覧名勝図絵」長崎歴史文化博物館蔵)



